

た。各話題は、研究分野でのデータ収集・分析の方法の特色を簡潔にまとめてもらったため興味深いものが多かったものの、フロアからの議論が若干低調であった
(参加者：約50名)。(文責：友永雅己)

第2回 平成6年12月13日(火)

「霊長類の『病気学』」

講演者と演題

後藤俊二(サル施設)

「研究所のサルの疾病傾向」

鈴木樹理・松林伸子(サル施設)

「急性鼓脹症(ハラフクレ)と下痢症」

中村 伸(分子生理・遺伝子情報)

「病気と生体防御」

澤口俊之(行動神経・行動発現)

「脳の病 — 精神分裂病とパーキンソン病を中心に —」

マイケル=ハフマン(京都大学理学部)

「野生チンパンジーの『葉草』利用」

討論：天野浩一郎(国立療養所静岡東病院)・

濱井美弥(日本モンキーセンター)・松林清明

企画：鈴木樹理・國松 豊・金 熙洙(TA)・松元健二(TA)・山越言(TA)

内容：ヒトを含めた霊長類の疾病について理解を深めるために、「病気学」という入門編をめざした。企画と運営にはティーチング・アシスタント(TA)も参加した。

初めにこの研究所のサルの「病気」を取り上げ、後藤が研究所で飼育されているサル類が過去にどのような疾病に罹ったのかを臨床獣医学の立場から報告した。続いて鈴木らがその中でも問題になっている急性鼓脹症(ハラフクレ)と下痢症について報告した。中村は病気にかかる機序について、生体防御と病原体との関連から報告を行った。澤口は脳内伝達物質や脳細胞の異常によって引き起こされる病気をヒトを中心に報告した。ハフマン氏は野生のチンパンジーにみられた「葉草」を利用した腸内寄生虫の駆虫について報告した。各報告の後及び最後の総合討論では、討論者を中心に、様々な議論が為された(参加者：約50名)。(文責：鈴木樹理)

外国人研究員

氏名	受入教官	研究課題	招へい期間
William	庄武孝義	マカク属の比較	6. 7. 1
S. Procnier		遺伝子マッピング	～
		グと染色体進化	7. 6.30

招へい外国人学者

氏名	受入教官	研究課題	招へい期間
Iver H.	松沢哲郎	チンパンジーの	6. 5.18
Iversen		知性の比較認知	～
		科学的研究	6. 8.15
Vanessa	杉山幸丸	霊長類、とくに	7. 3.29
Jane Hayes		ニホンザルの行	～
		動・生態学的研	8. 3.28
		究	

外国人共同研究者

氏名	受入教官	研究課題	招へい期間
Vanessa	杉山幸丸	霊長類、とくに	6. 3.29
Jane Hayes		ニホンザルの行	～
		動・生態学的研	7. 3.28
		究	
Maria M.	大澤秀行	野生ニホンザル	6. 4.14
Balaguer		の行動研究	～
			6.10.31
Farajallah	川本 芳	カニクイザルの	6.12. 1
D. Perwitasari		集団遺伝学的研	～
		究	7. 1.15

外国人受託研修員

氏名	受入教官	研修題目	受入期間
Lawrence	松林清明	霊長類飼育管理	6. 5.16
Sirengo			～
			7. 1.31

日本学術振興会特別研究員

氏名	受入教官	研究課題	受入期間
揚妻直樹	加納隆至	霊長類の採食行	7. 1.24
		動	～
			7. 3.31

研 修 員

氏名	受入教官	研修題目	研修期間
瀬戸口	加納隆至	愛知県北西部に	6. 4. 1
美恵子		生息するニホン	～

		リスの個体数及び年齢構成の調査	6. 7.31
芝原綾子	大澤秀行	配偶者選択の進化的意義と社会構造	6. 4. 1 ～ 7. 3.31
竹中晃子	竹中 修	霊長類に見いだされたP117遺伝子について	6. 4. 1 ～ 7. 3.31
小高 泰	三上章允	前頭葉における情報処理機構	6. 4. 1 ～ 7. 3.31
山下 香	野崎眞澄	霊長類におけるプロラクチン分泌調節	6. 4. 1 ～ 7. 3.31
日上耕司	松沢哲郎	霊長類の相互交渉に関する実験心理学的研究	6. 4. 1 ～ 7. 3.31
小川秀司	加納隆至	霊長類の社会的認知能力の進化	6. 9.25 ～ 7. 3.31

公立大学研修員

氏 名	受入教官	研修題目	研修期間
吉野賢一	久保田競	咀嚼運動のサル大脳による調節機構の研究	6. 4. 1 ～ 7. 3.31

研 究 生

氏 名	指導教官	研究項目	研究期間
Joseph Mark Soltis	杉山幸丸	ニホンザルを主とする霊長類の性選択と雄間競争	5. 7. 1 ～ 7. 2.28
柳原芳美	大澤秀行	霊長類等の社会構造の研究	6. 4. 1 ～ 7. 3.31
Domingo i R. Xavier	杉山幸丸	DNA多型解析による野生ニホンザルの生態と行動の研究	6. 4. 1 ～ 7. 3.31

特別研究学生

氏 名	指導教官	研究題目	研究期間
下堂園恵	久保田競	大脳運動野及び運動前野における脳の可塑性について	6. 4. 1 ～ 7. 3.31

海外からの来所者

氏名(所属)	訪問月	対応教官
Michael M. Günther (The University of Liverpool, UK)	1994.7.	木村 賛
Francoise K. Jouffroy (Museum National d'Histoire Naturelle, France)	1994.7-8.	木村 賛
Holger Preuschoft (Ruhr-Universität Bochum, Germany)	1994.7.	木村 賛
Michael D. Rose (New Jersey Medical School, USA)	1994.7.	木村 賛
Christine Tardieu (Museum National d'Histoire Naturelle, France)	1994.7	木村 賛
Joel A. Vilensky (Indiana University, USA)	1994.7.	木村 賛
吉 学平 [Ji Xueping] (中国雲南省博物館)	1995.2.	国松 豊
尹 濟雲 [Yin Jiyun] (中国雲南省地質科学研究所)	1995.2.	国松 豊
薛 順榮 [Xue Shunrong] (中国雲南省地質科学研究所)	1995.2.	国松 豊
Tashi Wangchuk (National Environment Commission, Bhutan)	1994.4.	杉山幸丸
David Hill (Hong-kong University, Hong-kong)	1994.7,12.	山極寿一・大澤秀行
Ruth Thomsen (Munchen University, Germany)	1994.10.	山極寿一・大澤秀行
Mwanza Ndouda (ザイール自然科学研究所生物学部)	1994.10-1995.1.	加納隆至・山極寿一
Sue Savage-Rumbaugh (Georgia State University, USA)	1994.10.	加納隆至・松沢哲郎
Duane Rumbaugh (Georgia State University, USA)	1994.10.	加納隆至・松沢哲郎
Warren, Y. Brochelman (Mahidole University, Thailand)	1995.2.	大澤秀行

Anne Fernold (Stanford University, USA)
 1994.6. 松沢哲郎・藤田和生・友永雅己
 Anne Russon (York University, Canada)
 1994.7. 松沢哲郎・藤田和生・友永雅己
 Sally Boysen (Ohio State University, USA)
 1994.8. 松沢哲郎・藤田和生・友永雅己
 Kim Bard (Yerkes Regional Primate Research Center, USA)
 1994.8. 松沢哲郎・藤田和生・友永雅己
 Robert Shumaker (Smithsonian Museum, USA)
 1994.8. 松沢哲郎
 Jane Goodall (Jane Goodall Institute, UK)
 1994.10. 松沢哲郎・藤田和生・友永雅己
 Blandine Brill (Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, France)
 1994.10. 松沢哲郎・木村 賛・杉山幸丸
 Remy Lestienne (CNRS Washington Office, USA)
 1994.4. 久保田 競
 J. David Cooke (University of Western Ontario, Canada)
 1994.4. 久保田競
 James Ashe (Brain Sciences Ctr., VAMC, USA)
 1995.3. 久保田競
 Donald Crammond (MINH, USA)
 1995.3. 久保田競
 Marie-Claude Hepp-Reymond (University of Zurich, Switzerland)
 1995.3. 久保田競
 Jens Bo Nielsen (University of Copenhagen, Denmark)
 1994.3. 久保田競
 Jean Requin (CNRS, France)
 1995.3. 久保田競
 M. Matelli (Universita degli studi di Parma, Italy)
 1995.3. 久保田競

国際共同研究の実施状況

課 題：ヒヒ類の種分化と雑種形成に関する集団遺伝学的、生態学的研究
 財 源：文部省科学研究費国際学術研究(海外学術調査)
 期 間：1994年度(1990年～1996年)
 主たる研究対象：ヒヒ類
 相手国と研究地：エチオピア
 代 表 者：庄武孝義
 分 担 者：森 明雄, 松林清明, 平井啓久(霊長

研), 岩本俊孝(宮崎大学)、
 Yalemstshey Mekkonen (アジスアベバ大学)

課 題：ケニア霊長類の保全遺伝学に関する研究
 財 源：国際協力事業団(JICA)
 期 間：1994年度(1991年～)
 主たる研究対象：ケニア霊長類
 相手国と研究地：ケニア
 代 表 者：庄武孝義
 共同研究者：Mohamed A. Isahakia (ケニア国立霊長類研究所)
 招へい者：L. Sirengo (ケニア国立霊長類研究所)
 派 遣 者：鈴木良太(元霊長研大学院生)

課 題：アフリカ在来N'Dama牛のトリパノソーマ抵抗性に関する遺伝学的研究
 財 源：国際協力事業団(JICA)
 期 間：1994年度(1989年～)
 代 表 者：庄武孝義
 共同研究者：ILRAD(国際獣疫研究所)
 招へい者：蛭海啓行(ILRAD細胞生物学研究部)
 派 遣 者：菱田 靖(京都大学農学部)

課 題：カニクイザルの集団遺伝学的研究
 財 源：インドネシア文部省、世界銀行
 期 間：1994年7月4日～1994年8月2日, 1994年12月1日～1995年1月21日
 主たる研究対象：カニクイザル
 相手国と研究地：インドネシア
 代 表 者：川本 芳
 共同研究者：Bambang Suryobroto, Farajallh Dyah Perwitasari (ボゴール農科大学)
 招へい者：Farajallh Dyah Perwitasari (ボゴール農科大学)

課 題：住血吸虫における染色体分化に関する分子細胞遺伝学的研究
 財 源：WHO(世界保健機構)「寄生虫ゲノムプロジェクト」
 期 間：1994年11月1日(～1996年度)
 主たる研究対象：住血吸虫類
 相手国と研究地：英国

代表者：平井啓久

共同研究者：David Rollinson（英国自然史博物館）

課題：アフリカ霊長類の比較行動・生態学的研究

財源：文部省科学研究費補助金（国際学術）

期間：1994年度（1976-1999）

主たる研究対象：野生チンパンジー、ゲノン類

相手国と研究地：ギニア共和国（ボッソウ、ニンバ山）、コートジボアール国（タイ、ニンバ山）

代表者：杉山幸丸

分担者：松沢哲郎、山越言（霊長研）、横田直人（大分短大）、外岡利佳子（名古屋大）、Jeremy Koman(Laboratoire Monts Nimba, Republique de Guinee)

課題：カメルーン北部の地上性霊長類の社会生態学的研究

財源：霊長類研究所海外特別事業費

期間：1994年7月－9月、10月－12月

主たる研究対象：パタスモンキー

相手国と研究地：カメルーン国、カラマルエ国立公園・南東カメルーン

研究者：大沢秀行

課題：生物多様性保全と持続的利用に関する研究

財源：（財）バイオインダストリー協会

期間：1994年12月－1995年1月

主たる研究対象：テナガザル、リーフイーター、マカク類

相手国と研究地：タイ国、カオヤイ国立公園、ケンクラチャン国立公園

研究代表者：河合雅雄（日本福祉大学）

分担者：大沢秀行

課題：知性に関する比較認知科学的研究

財源：文部省科学研究費補助金・国際学術研究（共同研究）

期間：1993年～1995年

主たる研究対象：チンパンジー

相手国と研究地：アメリカ合衆国（ニューヨーク）、

オランダ（アーネム）

代表者：松沢哲郎

分担者：小嶋祥三、藤田和生、友永雅己（霊長研）、H・テラス（コロンビア大学）

招へい者：ジェーン・グドール（イギリス、ジェーン・グドール研究所）、アン・ラッソン（カナダ、ヨーク大学）、キム・バード（アメリカ、ヤーキス霊長類研究所）、サリー・ボイセン（アメリカ、オハイオ州立大学）、イバー・イバーセン（アメリカ、ノースフロリダ大学）

派遣者：松沢哲郎（アメリカ、メキシコ）、藤田和生（インドネシア）、竹下秀子（オランダ）

課題：スラウェシマカクにおける種間雑種の形成と移行帯の構造－雑種崩落のメカニズム

財源：文部省科学研究費の国際学術研究（海外学術調査）

期間：1994年度（1994年～1995年）

主たる研究対象：スラウェシマカク類

相手国と研究地：インドネシア

代表者：竹中 修

分担者：渡辺邦夫、後藤俊二、藤田和生、川本芳（霊長研）、浜田 稷（岡山理科大）、Bambang Suryobroto（ボゴール農科大）

所 内 談 話 会

第1回：1994年4月28日「演題なし」中村克樹（認知学習分野）

第2回：1994年5月20日「The Ngaloba Cranium (Laetoli Hominid 18): A Fossil Human Cranium from the Northern Part of Tanzania」Prof. Cassian Celistin Magori (University of Dar es Salaam)（「ンガロバ頭骨（LH18）－タンザニア北部出土の化石人類頭骨」）

第3回：1994年6月30日「ウマの社会とについて」小林 隆（社会構造分野大学院生）

第4回：1994年8月15日「アフリカ睡眠病と睡眠病研究の現況」蛭海啓行（ILRAD細胞生物

研究部長)

第5回: 1994年9月8日「ブラジル南東部で発見されたティティのニューフォーム」小林秀司(日本モンキーセンター)

第6回: 1994年10月27日「Sexual dimorphism in the dentition of African colobus monkeys」Vanessa Jane Hayes (生態機構分野外国人共同研究者)

第7回: 1994年12月1日「A present status of primates and research organization in Zaire」Mwanza Ndunda (ザイール科学省森林生態研究所長、アフリカ地域研究センター客員教授)

(94年度談話会係 高井正成)

所員主催研究会報告

国際シンポジウム「霊長類移動運動の発達と制御」
Development and Control in Primate Locomotion

1995年7月24日から29日まで、愛知県犬山市福祉会館において京都大学霊長類研究所主催の上記国際シンポジウムが開かれた。霊長類は他の一般四足哺乳類と移動運動様式において異なることが明らかになってきている。とくにその個体発達と制御は現在の緊急な課題である。近年の研究開発を現在の時点で討議するために、第15回国際霊長類学会(I P S)大会プレコングレスシンポジウムとしてこの会議が開かれた。7ヶ国51名の参加者があった。開催には文部省国際シンポジウム開催経費の他、井上科学振興財団、大幸財団、犬山市の援助をうけた。

シンポジウムは1.比較研究、2.発達研究、3.機械的制御、4.神経制御の4セッションに分けて行われた。

第1セッション比較研究。化石の証拠を現生のモデルからいかにとらえるかを、特に中新世類人猿化石を材料として討論された。新しい技法による詳細な研究がロコモーションモデルを構築できることが示された。また従来研究の少なかった背筋構築に付いての詳しい成果が発表された。

第2セッション発達研究。筋骨格系ロコモーションパタンの個体発達が調べられた。特にヒト二足歩行の獲得過程と関係して、類人猿の二足歩行の個体発達についての議論が集中した。類人猿の二足歩行個体発達がヒトのモデルとなりうる部分と異なる部分との識別が行われはじめた。

第3セッション機械的制御。ロコモーションの力学と、それに関係する体の大きさ、体節の物理常数、筋の長さが論じられた。実際のヒトがいかにうまく歩行するかは、このような力学的パラメータの調節の上にあることが示された。また特異なテーマとして呼吸と運動との関係が論ぜられ、息こらえによる上肢支持が霊長類の樹上生活内適応的進化をもたらしたことが示された。また尾の意義が討議された。

第4セッション神経制御。神経筋単位、小脳運動中枢の比較解剖学的研究がまず発表された。次いで運動の神経制御の新しいモデルが発表され、その有効性について議論が行われた。最後に歩行強調運動の神経制御について、網様神経系の詳細な研究の紹介、ヒトの二足協調運動と呼吸、心拍との関係が発表された。脳損傷サルの研究により、サルの協調運動は一般四足獣と異なる可能性が示唆された。神経制御の問題はなお今後の展開が必要であることが合意された。

このシンポジウムの成果については1994年8月にインドネシアバリ島で開かれた第15回I P S大会でまとめの発表を行った。本論文は1996年度中にFolia Primatologicaの特別号として印刷発表の予定である。

(文責: 木村 賛)